

【報告】

一橋大学附属図書館 図書館グローバルデザイン・ワーキング・グループ活動報告

藤井 眞樹

(学術情報課目録情報係)

三浦 翔子

(学術情報課図書情報係)

寺島 久美子

(学術情報課雑誌情報係)

一橋大学学術・図書部

1. はじめに

一橋大学附属図書館（以下、当館）では、特定の目的を遂行するために、係を横断してワーキング・グループが立ち上げられている。こうしたワーキング・グループの一つとして、平成27年度に、「図書館グローバルデザイン・ワーキング・グループ」（以下、グローバルWG）が設置された。

ここでは、平成27年度、28年度の2年間のグローバルWGの活動内容を報告するとともに、今後の活動予定および課題について述べる。

2. 設置の目的および体制

2.1. ワーキング・グループ設置の経緯と体制

平成27年度当初に、海外からの来客への対応を機に、大学全体のグローバル化や留学生の増加に対して、図書館の役割・サービスを考えていく必要があるとして、WG体制での検討・対応を行うことを決定した。

ワーキング・グループの名称は、「本学のグローバル化に対応した図書館サービス・図書館活動のデザイン（企画）をする」との意図をもって、「図書館グローバルデザイン」ワーキング・グループとした。

平成27年度に設置された当初は、学術情報課長を含め5名の教職員をメンバーとした。メンバーには、洋書の受入担当者や海外研修の経験者である若手係員3名と、利用者の視点を持っているという点から研究開発室の専門助手を加えた。また、オブザーバーとして学術

情報課課長代理2名も参加した。

平成28年度当初に、他のワーキング・グループと合わせて、正式に「ワーキング・グループ設置要領」を裁定した。前年度から引き続き係員2名（人事異動のために1名減）と研究開発室専門助手1名、加えて図書館の利用者と直接接する機会が多い利用者サービス係とレファレンス係から係員1名ずつをメンバーとし、係長1名を主査として、合計6名のメンバーとした。

当初から、メンバーは1～2年程度で交代し、幅広い人材育成を促すことを考えている。

2.2. ワーキング・グループの目的

図書館グローバルデザイン・ワーキング・グループ設置要領によると、グローバルWGは、海外からの留学生や海外へ飛び立つ日本人学生の支援を通して、附属図書館のグローバル化を図ることを目的とし、以下の活動を行う、としている。

- (1) 図書館概要等の各種案内の多言語化
- (2) 留学生ガイドツアー等の対応
- (3) 国際教育センターや担当教員等との連携によるニーズの把握
- (4) 留学生へのインタビュー等によるニーズの把握
- (5) ニーズに対応した改善策の策定
- (6) その他図書館のグローバル化に関すること

3. 活動内容

この2年間の活動として、英語版『附属図書館概要』の作成、留学生向け図書館ツアーの実施、国際ワークショップへの協力、オンデマンド・ガイダンスへの協力の4つについて報告する。

3.1. 英語版『附属図書館概要』の作成

3.1.1. 作成までの経緯

平成27年度のグローバルWGの主な活動のひとつとして、英語版の『附属図書館概要』（以下、『英文概要』）の作成が挙げられる。『英文概要』は、主に海外からの来客に対し、当館を紹介することに重点を置いたパンフレットである。正式名称は *Outline of the Library*

(URL: <http://www.lib.hit-u.ac.jp/en/about/gaiyou/Outline2016.pdf>) で、現在 2016 年度版が刊行されている。

グローバル WG 発足以前は、学内者向けの図書館利用案内の英語版はあったものの、『概要』に該当するような、図書館の基本的なデータや活動内容を英語でまとめた刊行物は存在していなかった。しかし、海外からの来客などに図書館を紹介する刊行物の必要性が認識される機会があり、来客の増加を背景に、『英文概要』の作成を決定した。

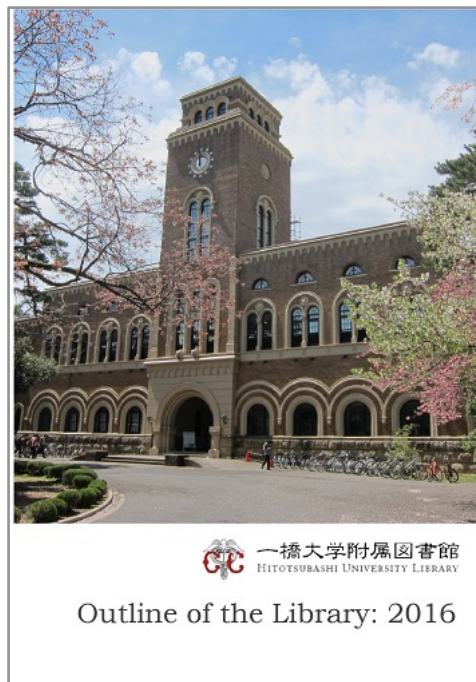


図1 英語版『附属図書館概要』表紙

3.1.2. 事前調査および構成と作成方針の決定

まず、『英文概要』作成の参考にするため、海外の大学図書館のパンフレット類を収集した。続いて、それらを参考に、概要に盛り込む内容の構成を以下のとおり決定した。

- 1) History (図書館の歴史)
- 2) Organizational Structure (組織図)
- 3) Research Development Office (附属図書館研究開発室の紹介)
- 4) Facts & Figures (図書館の統計データ)
- 5) Learning Support (情報リテラシー関連の活動紹介)
- 6) Activities to Promote Reading (読書推進活動の紹介)

7) Collections (図書館所蔵の文庫の紹介)

8) Exhibitions (図書館公開展示室で行なわれている展示の概要)

9) Institutional Repository (本学機関リポジトリの紹介)

10) Grants & Donations (図書館が受け取っている助成金や寄付金の紹介)

まず、内容の執筆にあたっては、平易でわかりやすい英語を用いる、来客対応の際に渡すことを想定し、できるだけコンパクトにおさまるよう掲載する内容を絞り込む、写真や図版を多く用いて見やすさを意識するという基本的な方針を立てた。

特に、英文の執筆にあたっては、文法的に正しい英語で長い文章を書くのではなく、伝わりやすいことを優先して、英語が母国語ではない人にも理解しやすい文章を書くことを心掛けた。

各項目はグローバルWGのメンバーが分担して執筆し、分量はそれぞれの項目をA4サイズ1~2ページ程度におさめた。後日、編集担当の職員が各項目を取りまとめ、デザインの統一やレイアウトの調整などの編集作業を行った。最終的には、学内の広報関係の部署で行っている英文校閲を受けた後、刊行した。

3.1.3. 特徴

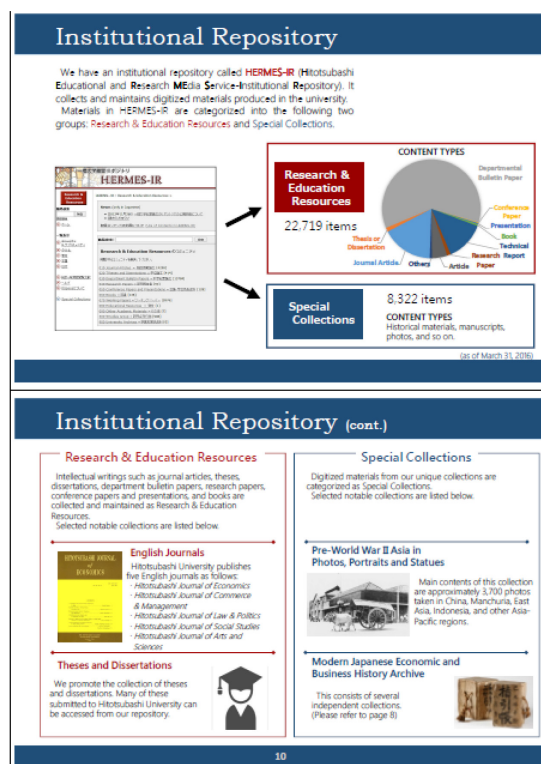
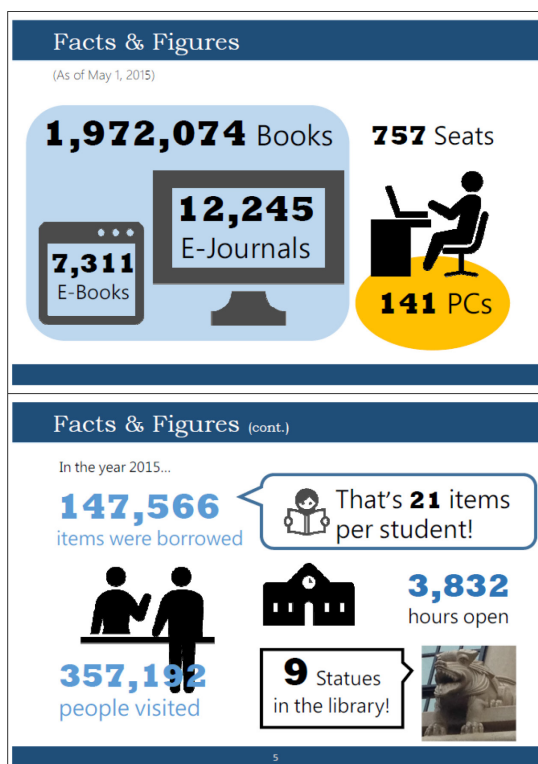
『英文概要』は、これまで作成されていた日本語の『附属図書館概要』をそのまま翻訳することはせず、以下のとおり、従来にはない視点をもって新たに作成した刊行物といえる。

第一は、写真やアイコンなどを活用し、ページの視認性を高めたという点である。特に象徴的なのは”Facts & Figures”のページで(図2参照)、ここでは、所蔵冊数などのデータ類を、図を用いて見やすくまとめているとともに、当館の特色をピックアップし、さらにオフィシャルな統計にはないようなユーモアも加味して印象付ける工夫を行った。また”Institutional Repository”のページ(図3参照)では、色の使い分けによって、本学の機関リポジトリにおける Research & Education Resources / Special Collections という2つのカテゴリーの特徴と、それぞれに含まれる代表的なコレクションが一目でわかるようにした。これら以外のページも、単にデータや文章を並べるだけではなく、見やすさや目を引くことを意識した。

第二は、対外的なアピールという点を意識して、内容の構成を決定したという点である。これは、London School of Economics and Political Science (LSE)などの海外の大学図書館

のパンフレット類を調査した結果、それらの内容に倣ったものである。日本語版『附属図書館概要』は、図書館を紹介するパンフレットというよりは、図書館の活動内容やデータ類を網羅した資料集としての側面が強く、分量も計47ページと大部になっている。一方『英文概要』では、当館の歴史や組織図といった基本的な項目に加え、当館の特色や活動内容のハイライトといった、当館への来客および日本国外の読者にアピールしたいことをコンパクトにまとめた。

『英文概要』は、当初の作成目的でもあった「海外からの来客時対応に使用する」という点ではもちろん、当館職員が海外の大学図書館等へ研修に赴いた際に、先方に当館について説明する資料として重宝している。また、学内者からも、留学生等に対して簡単に図書館を紹介できる資料だとして好評を得ている。



左：図2 英語版『附属図書館概要』p. 5 "Facts & Figures"

右：図3 英語版『附属図書館概要』p. 10 "Institutional Repository"

3.1.4. 配布・公開・広報

完成した『概要』は、海外からの来客対応時や留学生への図書館ツアー開催時など、必要

に応じて冊子体の形で印刷・製本し、配布している。

また、後日、当館の英語版ウェブサイトの「About Us」(URL: <http://www.lib.hit-u.ac.jp/en/about/gaiyou/>) ページにてウェブサイト訪問者が自由にダウンロードできる形で公開した。ウェブサイトでの公開後には、図書館ウェブサイトのお知らせや図書館の Facebook を用いて広報を行った。

3.2. 留学生向け図書館ツアーの実施

平成 27 年秋、平成 28 年春、秋の 3 回にわたり、留学生に対して、約 30 分の図書館ツアーを実施した。これは、平成 27 年春まで、利用者サービス係と情報リテラシー・ワーキング・グループを中心に実施していた英語での図書館ツアーを、グローバル WG 設置に伴い、引き継いだものである。

従来、一橋大学へ留学してくる学生は、比較的、日本語力が高い学生が多かった。しかし、最近の留学生受け入れ体制の多様化に伴い、日本語初学者の留学生が増加しており、英語での図書館ツアーの必要性は増大している。

この留学生向け図書館ツアーは、国際課が行うオリエンテーションの一環として行っているものである。対象の学生を 10 名～20 名のグループに分け、グローバル WG メンバーが説明者として館内を実際に歩きながら案内し、口頭で説明を行う形式である。事前に日本語の図書館利用案内と英語の利用案内リーフレットを配付し、当日の参加者には、図書館内でのプリントアウト方法の案内（英文）も配付している。

平成 27 年秋の図書館ツアーは、平成 27 年 9 月 25 日（金）に実施した。対象は、留学生 125 名である。事前に国際課でグループ分けを行い、1 コマ 30 分×2 グループ×4 回の計 8 グループに対して英語でのツアーを実施した。説明はグローバル WG メンバー 5 名が交代で担当した。

シナリオは、日本語ツアーの内容をほぼそのまま英訳したものを使用したため、内容が詳しく、かなり時間的に厳しい状況となった。1 グループの人数が多かったため、移動の際に学生の一部が遅れがちになったのもその一因である。終了後、担当者から説明内容の優先付けを行っておく方がよいという意見が出された。

平成 28 年春の図書館ツアーは、平成 28 年 4 月 4 日（月）に実施した。対象は留学生 50 名である。事前にグループ分けを行い、英語での説明は 1 コマ 30 分×2 グループ×2 回、また留学生の中でも英語より日本語の説明を希望する学生のために、日本語での説明を 1 コ

マ 30分×1グループ×1回行った。説明はグローバルWGメンバー4名が交代で担当した。シナリオは前回から大きく変更することはしなかったが、前回の反省点から、時間が足りなくなった場合を想定して、各担当者で説明の優先順位を考えた上で実施したため、時間不足になるという状況は免れた。この回から、前述の『英文概要』を学生に配付し、蔵書冊数等のデータは、『英文概要』を参照してもらうよう説明を行った。反面、学生がすぐに必要としていたPCの利用方法やネットワークの説明に不足があり、次回への反省点となった。

平成28年秋の図書館ツアーは、平成28年9月28日(水)に実施した。対象は留学生50名で、事前に3グループに分け、英語でのツアーを実施した。前回のツアーでの学生からの質問や、担当者側の反省点を踏まえ、図書館の概略説明は大幅に省略し、より実際の利用に即した点を中心に説明するシナリオに変更した。具体的には、留学生の多数が使用するバーコード式利用証での入館方法の説明、インターネット端末へのログイン方法の実演、プリンタへの出力方法の説明、個人の端末からのネットワーク接続方法の説明等を盛り込んだ内容とした。また、これまで1グループに対して説明者が1名での案内であったが、今回は1グループに対して説明者1名と補助者1名を担当とし、3グループに対して計6名のグローバルWGメンバーが担当した。それにより、学生への目配りが行き届き、スムーズに進行することができた。今後も、担当者2名体制で対応することが望ましいと考えている。

3.3. 国際ワークショップへの協力

平成28年2月12日(金)に開催された国際ワークショップ、“Rare Materials, digitization, and the role of curators”(「貴重資料・デジタル化・キュレータの役割」)の運営、進行にあたって、グローバルWGメンバーが協力した。

この国際ワークショップは、平成28年度から一橋大学社会科学古典資料センターが実施している「西洋古典資料の保存に関する拠点およびネットワーク形成事業」のプレイベントという位置づけで開催された。内容としては、貴重資料のデジタル化が急速に進む昨今におけるキュレータの役割の現状・使命・未来をテーマに、講演者2名が発表を行い、その後質疑応答を行った。

この国際ワークショップに関連して、以下のとおり、グローバルWGが協力した。

まず、海外からの招聘者への対応である。この国際ワークショップには、講演者としてオックスフォード大学ボドリアン図書館のPip Willcox氏、および参加者としてアムステルダム自由大学のInger Leemans教授を招聘した。この2名の招聘者の対応に、グローバルWG

メンバーがあたり、また、ワークショップ終了後の懇親会にも参加して、海外と日本の図書館事情について情報交換を行うことができた。

次に、一橋大学側の講演者の発表資料の英訳と発表の補助である。グローバル WG メンバーが英訳を分担し、また当日の発表は日本語で行われたが、英語での読み上げをグローバル WG メンバーが担当した。その後の全体での質疑応答においても、グローバル WG メンバーが通訳を行った。

最後に、ワークショップの広報および報告として、Facebook への記事掲載を担当した。通常、こうしたイベントの記事は、日本語のみで掲載しているが、国際ワークショップということもあり、日本語、英語それぞれに記事を掲載した。

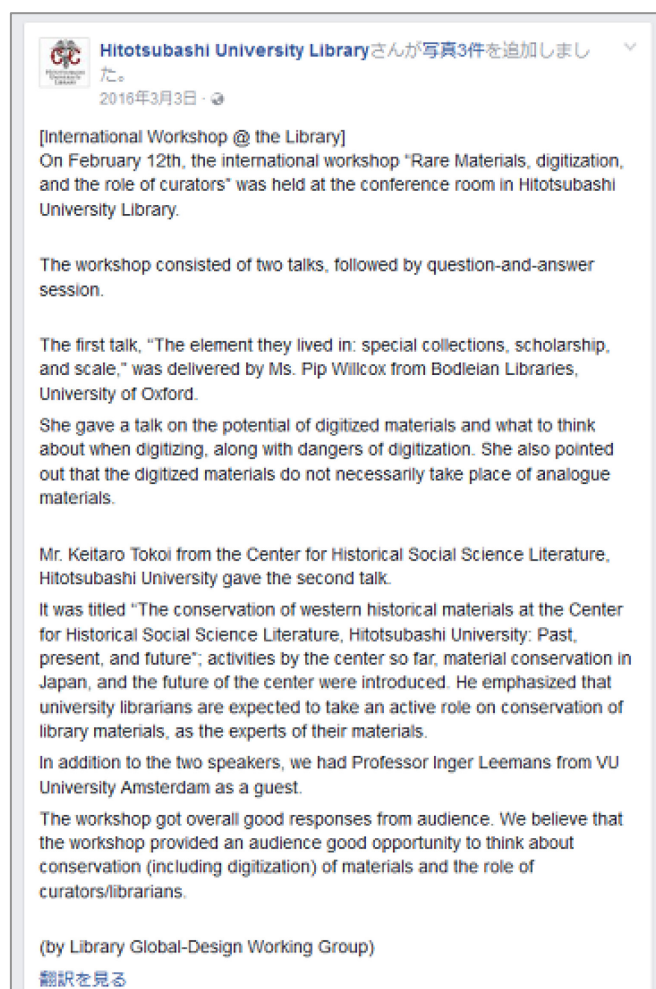


図4 当館 Facebook 掲載の国際ワークショップ開催報告記事（2016年3月3日投稿）

なお、国際ワークショップについての詳細は、一橋大学ウェブサイトの紹介記事（URL: <http://www.hit-u.ac.jp/function/outside/news/2016/20160301.html>）を参照されたい。

3.4. オンデマンド・ガイダンスへの協力

当館では、レファレンス係が中心となって、教員からの要望に応じて実施するオンデマンド・ガイダンスを行っている。ガイダンスの内容は、図書館側が用意した15分～30分程度の長さのコンテンツの中から教員が複数選択して組み合わせるといったものである。

平成28年度には、商学研究科の教員から、留学生を主な対象とした授業において、英語でのオンデマンド・ガイダンスを行ってほしいとの要望があり、レファレンス係からグローバルWGへの協力の要請があった。

担当者との検討の結果、今回は対象学生の数が少ないということと、準備期間が短いという制約もあり、プレゼンテーション自体はレファレンス係担当者が日本語で行い、グローバルWGメンバーが英語でのフォローを行う、配信資料は英語版のものを作成すると決定した。

教員と相談の上、以下の3つのコンテンツでガイダンスを行うこととした。

- (1) 文献検索のコツ[2～4年生向け] (HERMES¹での蔵書検索と検索のコツ、MyLibrary²)
- (2) 英語論文の検索と入手 (Web of Science、HERMES-Link³)
- (3) 海外の統計を調べる (公的機関の統計を中心に)

まず準備として、(1)(2)の日本語版の配信資料から、英語版を作成することに着手した。基本的には日本語版をそのまま英語に置き換えたが、内容が的確に伝わるよう意識した部分もある。データベースの検索キーワードは、英語での検索に相応しいものに変更し、また、画面キャプチャ等はすべて英語版の画面に差し替えを行った。(3)については、レファレンス係で配信資料を準備した。

当日は、学生4名に対して、プレゼンテーション担当としてレファレンス係から1名、フォローアップ担当としてグローバルWGから2名がガイダンスを実施した。また、教員からも適宜フォローを受けることができた。日本語での説明に加えて、英語でのフォローを行ったため、日本語のみでのガイダンスに比べるとかなり時間がかかり、(3)についてはかなり駆け足での説明になってしまったのが反省点である。

今後は、他のコンテンツの英語版の作成を行うとともに、説明自体を英語で行うことについても検討を進めていく必要がある。

4. 今後の活動と課題

グローバルWGの目的として設置要領に挙げられている6つの目的のうち、(1)～(3)

についてはこの2年間である程度の活動を行うことができた。

(1) 図書館概要等の各種案内の多言語化は、3.1で述べたとおり、『英文概要』を発行したが、引き続き数値等の改訂を行うとともに、学内者向けの英語版利用案内の作成(改訂)にも着手できるとよいと考えている。利用案内についても、『英文概要』と同様に、日本語版の単なる英訳ではなく、利用者の必要としている情報がわかりやすく伝わるよう内容を絞り込むということを意識して作成したい。

(2) 留学生ガイドツアー等の対応は、グローバルWG主導となって以降、すでに3回のツアーを実施しているが、平成29年度から4学期制が導入されることに伴い、実施時期や実施回数、内容についても再度検討する必要がある。ツアーの回数が増加することが見込まれるため、グローバルWGメンバー以外でもツアーの案内を担当できる職員を養成することが望まれる。

(3) 国際教育センターや担当教員等との連携によるニーズの把握は、平成28年度当初に、教員からの「今後留学する予定の日本人学生向けの授業」についての問い合わせを受けている。内容が、これまで図書館で実施してきた海外からの留学生向けのガイダンスとは異なる視点のものであるため、今後、どのような内容でコンテンツを作成すべきかをよく検討する必要がある。また、留学生向けの英語でのガイダンスについては、各コンテンツの英語版作成が課題の一つではあるが、それぞれのコンテンツにどれだけのニーズがあり、何を優先して作成すべきかの検討が必要である。また、平成28年度に実施したガイダンスでは、日本語版のコンテンツをほぼそのまま英語化したのが、これも留学生がより必要としている情報が何であるかを把握し、そこにポイントを絞って、『英文概要』と同様にわかりやすい英語で伝えるという視点からのコンテンツの作成を考えるべきであろう。

平成29年度以降、これまでに着手していない設置要領の(4)(5)が今後の課題となる。

(4) 留学生へのインタビュー等によるニーズの把握は、現時点ではまだ実施できていない。今後考えられる対応としては、図書館ツアーに参加した学生へのアンケートの実施や、留学を終えて帰国する直前の学生へのインタビューが想定される。前者は、本学へ来たばかりの留学生が必要とするニーズを汲み取るためであり、後者は、本学で一定期間学習した留学生にとって、何が有用だったのか、何が不足だったのかを調査することを目的としている。こういったニーズの把握を行うためにも、さらに国際課等の学内他部署とも連携・協力していきたい。こういったニーズの把握を行った上で、(5)のニーズに対応した改善策を策定していく必要がある。

別件として、(6)その他図書館のグローバル化に関することとして、館内のサインの英語化、英語アナウンスの見直しも課題として挙げられている。また、一橋大学附属図書館のウェブサイトの英語版は、まだまだ充実しているとは言い難い。こちらについても、日本語版の構成・内容にとらわれることなく、利用者が何を必要としているか、図書館は何を伝えたいのかという点から、内容を考える必要がある。

設置要項に挙げられた目的以外の課題として、以下の二点がある。

第一に、人材育成・確保の問題である。2.1 で述べたように、グローバル WG のメンバーは、1～2年程度で交代し、幅広い人材育成を促すことを想定している。しかし、現状では個人の語学力に頼っている点が多く見られる。個人の能力に頼っているのは、人材が限定され、幅広い人材育成には結び付かない。グローバル WG が何を目的としており、どのような人材を求めているのかを、もっと明確にした上で、新しいメンバーに引き継いでいく必要がある。

第二に、グローバル WG に対する館内の意識の改革である。残念ながら現状では、英語、国際といったキーワードが出てくると、そのままグローバル WG の仕事と認識されている状況である。

しかし、グローバル WG は、何かを英語化したり、英語での対応を行ったりする実働部隊として存在するのではない。設置要領にもあるとおり、「附属図書館のグローバル化を図ること」がグローバル WG の目的である。その目的を遂行するために、グローバル WG のメンバーに語学力があることは望ましいが、それだけがすべてではなく、図書館のグローバル化に何が必要かというアイデアを出し、方針を立てることが求められている。図書館のグローバル化は職員全員の課題であり、それを牽引していく中心的役割としてグローバル WG があるということを、再度、館内全体で認識する必要があるのではないだろうか。

¹ HERMES（ヘルメス）とは、Hitotsubashi Educational and Research MEdia Service の略。一橋大学附属図書館の蔵書検索システムの愛称。

² MyLibrary とは、一橋大学附属図書館の学内利用者向けポータルサイト。貸出状況照会、予約、図書購入リクエストなど、図書館サービスの一部をオンラインで利用できる。

³ HERMES-Link とは、一橋大学附属図書館のリンクリゾルバの愛称。検索した論文を入手できるリンク先を表示し、利用者をナビゲートする機能がある。

[Report]

Report on Global Design Working Group of Hitotsubashi University Library

Fujii, Maki.

Cataloging Section, Library Affairs Division, Department of Libraries and Information,
Hitotsubashi University

Miura, Shoko.

Acquisition Section, Library Affairs Division, Department of Libraries and Information,
Hitotsubashi University

Terashima, Kumiko.

Serials Section, Library Affairs Division, Department of Libraries and Information,
Hitotsubashi University